慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	信の現成 : 道元の學道論
Sub Title	
Author	中山, 一義(Nakayama, Kazuyoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1944
Jtitle	哲學 No.25/26 (1944. 6) ,p.182- 227
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	船田三郎教授還暦記念特輯
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000025-0182

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

信の現成

——道元の學道論——

中山一義

一

「佛道の大海は信を以て能入となす。」とは大論に於ける龍樹の言である。信はまた道に向つての誠心といふ意味で道心とも云はれてをるが、「道心ありて名利をなげすてんひと、いるべし。いたづらに、まことなからんものいるべからず。あやまりていれりとも、かんがへていだすべし。」と道元も說いてゐる。信は學道の第一歩でなければならない。佛敎に於ては修道の段階を信・解・行・證の四となし、修道の第一歩に信を置き、信が展開して解となり、解が展開して行となり、行が展開して證となると見てをる。逆に證は解行の完成であり、解行は信の完成せる態とも說いてゐ

る信は解行を含蓄し、證はこれら三者を一として體現的に包含したものであると云ふ。從つて信が、學道の第一歩であるといふことは、終に對する始をのみ意味するのではない。信は道に對する易らざる信念として、道に對する不退轉の勇猛心として、學道の全行程を貫くべきものでなければならない。

かくの如く、信が學道の始めであるとともに、その全行程を貫くべきものであるといふことは、論理的にはいかなる意味であらうか。信は學道を成り立たしめる根底であるといふ意味でなければならない。信の現成があつて、はじめて學道の第一歩が踏み出されるとともに、信といふ場所に於てつねに學道が行ぜられることを意味する。信は實に學道の場所にほかならない。しかし、學道の場所としての信の性格並にその構造についての根本的な考究は他の論文に讓らなければならない。（道元の學道論その三、「學道の場所としての信の構造」）當面の論文は、かかる學道の場所としての信がいかにして現成するものなるか、道元の說くところに聽從したものにほかならない。

二

併し、信の現成の問題に入る前に、簡單にその場所的性格を述べる必要がある。

信は道に向ふ心であり、道を見る淨眼であるといふ。絶對者を見る心眼である。道元も「しかあればしりぬ。心頭眼ありて見佛す、信解眼ありて見佛す。」（見佛）と述べてゐる。しかし、信眼が絶對（道或は道の體現者としての佛）を見るといふことは、知情意が夫々眞美善を志向的に對象として見るといふことと、同じ意味に於て見るのではない。信は絶對者を直接に見るのではない。信は却つて相對者たる人間が、自己の有限性を自覺することであり、人間が人間の限界を見ることでなければならない。信の志向は人間の限界たる死と罪とでなければならない。人間的存在の有限性の自覺に徹することこそ信そのものでなければならない。しかし、この自覺は、知情意に於てみられる如く、自己を外化し、表現的に自己に於て自己を見るの自覺ではなく、却つて、絶對者に光被されることによつて、自己ならぬ絶對他者に於て自己を見出すのである。絶對者の光に照らされて自己の限界を見るのである。信に於ては、主體は、むしろ絶對者であるといふことができる。相對者は絶對者によつて自己の存在を與へられるといふ意味をもつのである。だから、絶對者に於て相對者は自己の無を見るのである。絶對者に於て、相對者が自己の絶對無を自覺するのが信にほかならない。信は一方に於て、絶對が相對に向つて自己を啓示する場所であるとともに、他方に於て、相對が絶對に於て自己の無を見る場所でもある。信に於て、絶對と相對とは、以上のやうな二重の意味

で相觸れるといはなければならぬ。道元が學道用心集に「自己本在二道中一」との自覺を以て、學道の第一歩としてゐるのは、この意味にほかならない。

三

佛道に入るとは、それ故に、安心を獲ることではなくて、むしろ、人生の無常なること(死)と、人間の救はれてゐないこと(罪)とを、先づ發見することである。自己の死と罪の存在たることを自覺することが、學道の第一歩であつて、かゝる意味で、それは安心をではなく、却つて人間的生の根源的不安を與へるものである。茲に於て吾人は人生の根本義に觸れるのである。自己が絶對他者(眞實在)に於て自己(無)を自覺するとはかゝる謂にほかならない。

このやうに、絶對他者に於て、自己の無を見るものにして、即ち自己の存在の無常迅速と罪業深重とを見るものにして、はじめて絶對者の前に自己を懺悔することができるのである。懺悔とは絶對者の前に自己を無と爲すことでなければならない。逆に云へば、絶對者の前に自己を無となすものにして、はじめて絶對者を見るものといふべきである。先にいふ「信解眼をえて見佛す」とはこの謂でなければならない。淨信は懺悔の功德によつて現成するのである。「心も肉も、懈怠にもあ

り、不信にもあらんには、誠心をもはらして前佛に懺悔すべし。恁麼するとき前佛懺悔の功德力、われをすくひて清淨ならしむ。この功德、よく無礙の淨信精進を生長せしむるなり。」（谿聲山色）懺悔の功德によつてよく清淨たるをうるのである。信はつねによく清淨でなければならない。清淨なる信の場所に於て、はじめて眞の道理（絶對）を見ることもでき、眞の行をも行じうるのである。本當に人生に意義ある仕事を爲しうるのである。懺悔の功德によつて、またよくその仕事を成就しうる無礙の精進力を與へられるのである。絶對清淨なる信の場所は見佛の場であるとともに、また行佛の場でもなければならない。「懺悔すれば、かならず佛祖の冥助あるなり。心念身儀發露白佛すべし。發露のちから、罪根をして銷殞せしむるなり。これ一色の正修行なり、正信心なり、正信身なり。」（谿聲山色）絶對者の前に自己の無を自覺し（自己に絶對に死し）て後、絶對者に於て再び新たに見出しえたる生こそ、眞の生でなければならない。一色の正修行とはかゝる生の謂である。正信身・正信心とは、かゝる新生によつてかちえた身心にほかならない。道元の云ふ脫落身心、身心脫落の境涯はこの意味のものでなければならない。さらに、かゝる身心もて行ずる仕事こそ眞正の仕事でなければならない。

四

信は前述の如く、道に向ふこころとして、即ち道（菩提）心として、絶對者に於て自己の無を見るものであるとともに、道に於て働かんとの願を發するものでなければならない。併し、道に於て働くとはいかなることであらうか。それは絶對利他行にほかならない。發菩提心とは絶對利他の行願を發することでなければならない。「菩提心をおこすといふは、おのれいまだわたらざるさきに、一切衆生をわたさんと發願しいとなむなり。」（發菩提心）絶對利他行とは、自未得度先度他の謂である。絶對利他行とは、しかし、かゝる「自未得度先度他の心をおこせるちからによりて、われほとけにならんとおもふ」ことさへも嫌ふのである。それは、「たとひほとけになるべき功德熟して、圓滿すべしといふとも、なほめぐらして衆生の成佛得道に回向する」（發菩提心）のでなければならない。自未得度先度他の心とは、「いかがして一切衆生をして菩提心をおこさしめ、佛道に引導せましと、ひまなく三業にいとなむ」（發菩提心）こころである。從つて、菩提心は利益衆生のこころであり、自未得度先度他の心であるといつても、「いたづらに世間の欲をあたふるを、利益衆生とするにはあらず」、どこまでも、「衆生を利益すといふは、衆生をして自未得度先度他のこころをおこさしむる」

（發菩提心）ことでなければならない。發菩提心とは一切衆生をして發菩提心せしめんと願することにほかならない。絶對利他と云はれる所以である。

五

以上信の構造について略述してきた。「髓をうること、法をつたふること、必定して至誠により、信心によるなり。」（禮拜得隨）といはれるごとく、學佛道に於ける得髓傳法が至誠と信心とによること必定であるならば、かゝる至誠と信心とは何處より來り、何處へか去り行くものなのであらうか。「誠心ほかよりきたるあとなく、内よりいづる方なし。」（禮拜得隨）至誠信心は來るに來處なく、去るに去處なきものである。それらは、前述の如く、どこまでも自己の絶對無の自覺とともに、現成するものでなければならない。至誠信心は、「ただまさに法をおもくし、身をかろく」し、「世をのがれ、道をすみかとする」（禮拜得隨）ところに現成する。「いささかも身をかへりみること、法よりもおきには、法つたはれず、道をうることなし。」（禮拜得隨）といはれるごとく、一切を放下せざるところに、至誠信心は現成しない。絶對者の前に自己の死と罪の存在たることを自覺するとは、一切を放下することである。神佛の前に懺悔してゐる姿こそ、身心脱落脱落身心にほかならない。それは絶

對無の自覺である。信の現成である。

六

以下はこの論文の本論である。

信の現成はいかにして可能であるかの問題の論理的根據を明らかにするのが目的ではなく、その方法論が當面の問題である。それは前述によつても明らかなやうに、一切放下の問題に盡きる。道元の說く學道の用心はこの點に於て古今獨步である。

道元は正法眼藏隨聞記に一切放下を說いて次のやうに懇切を極めてをる。

學道の用心の第一として、「學道は先づすべからく貧を學すべし。」(第五) と誨へてゐる。龍牙の言に曰く、學道先須二且學レ貧、學レ貧貧後道方親と。釋尊の昔から今に至るまで、眞實學道の人たからにゆたかなりとは、聞いたこともなく見たことがない。(第四) 何が故に道人は貧でなければならないのであらうか。それは佛祖の行履であるからにほかならない。佛の慈悲の深重なことは喩へを以ても量り難いものがある。彼の所爲行履、皆是れ衆生の爲めである。一微塵といへども、衆生の爲めに利益でないことは行はなかつた。佛は輪王太子であつたから、卽位して一天をも意のままに

し、寶を以て弟子を憐れみ、所領を以て弟子を育くむべきであつたのに、何故に、位を捨てて自ら乞食を行じられたのであらうか。是決定末世の衆生の爲めにも、弟子の行道のためにも、利益となる因緣あるべき故に、財寶を貯へず乞食を行じおき給ふたのである。爾來、天竺漢土の祖師の、良き人とひとにも知られたものは、みな貧窮にして乞食されてをる。況や我が禪門の祖師は、皆財寶を貯ふべからずとのみ勸める。敎家でも禪宗を讃するには先づ貧をほめ、傳來の書錄にも貧を記してゐる。いまだ財寶に富み豐かにして佛法を行ずるとは聞いたことがない。皆よき佛法者といふものは布納衣常乞食に定つてゐる。禪門をよき宗といひ、禪僧を他に異るものとする初めの興りは、むかし敎院律院等に雜居してゐた時分にも、禪僧たちは身を捨てて貧人であつたからである。貧こそ宗門の家風であるといふことを道人は先づ存知すべきである。自分も田園等を持つた時もあり、亦財寶を領した時もあつた。併し、あの頃の身心と、現在貧しくて衣盂に乏しいのとを比較するに、只今の心身の方がすぐれてゐると考へる。是れ現證である、（第三）と道元は告白してゐる。彼はまた次のやうな實例をも擧げて學人に貧の學ぶべきを勸めてゐる。「大宋國によき僧と人にも知られたる人は、皆貧窮人なり。衣服もやぶれ諸緣も乏しきなり。往日天童山の書記、道如上座と云し人は、官人宰相の子なり。しかれども、親族をも遠離し世利を貪らざりしかば、衣服のやつれ破壞し

たること目もあてられざりしかども、道德人に知られて、名巒大寺の書記とも成られしなり。予あるとき如上座に問て云く、和尙は官人の子息にて富貴の種族なり、何ぞ身にちかづくる物皆下品にして貧窮なるや。如上座答て云く、僧となればなり。」（第五）以上學佛道の人の貧なるべきは、貧窮乞食が佛祖の行履なるが故であるといふのであるが、道元はまた他の處で、「貧しふして道を思ふは、先賢古聖の仰ぐ所、諸佛諸祖の喜ぶ所なり。」（第三）と說いてゐる。然らば貧は何が故に先賢古聖諸佛諸祖の喜ぶところであるのか。「世人を見るに、財ある人はまづ嗔恚恥辱の二つの難定めて來るなり。寶らあれば人是を奪ひ取らんと思ふ、我は取られじとする時、嗔恚たちまちに起る。或は是を論じて、問答對決に及び、つゐには鬪諍合戰をいたす。かくの如くのあひだに、嗔恚も起り恥辱も來るなり。貧にして貪ぼらざる時は、先づ此の難を免れて安樂自在なり、證據眼前なり。敎文を待つべからず。（中略）然あるに、愚癡なる人は財寶を貯へ、そこくの嗔恚をいだくこと、恥辱の中の恥辱なり。」（第三）だから、古聖先賢も是を謗り、諸佛諸祖も皆是を恥かしめてゐる、と學道の人の最も貧なるべき所以を明らかにしてゐる。しかし、道元は更に一歩を進めて、こころの貧しさにも說き及んで、貧ふして諂らはざるはあれども、富で奢らざるはなし、といふ外典の言葉を引いて、學人の「なほ富を制して奢らざらん事を思ふなり。最もこれ大事なり。よくよくこれを思ふ

べし。」（第五）と誨へ、學道の戒めとして、憍奢を第一の非なりとなしてをる。我が身の下賤を省みず高貴の人におとらじと思ひ、人に勝たうと思ふのは、憍慢のはなはだしきものといふべきである。けれども、是は戒めやすい。これに反して、世には生れながら、財寶に豊かに福分もある人は、多くの取り卷きもあり、人もちやほやする。從つてこれを是として憍るゆへに、傍らの賤しき人はこれを見てこころにうらやみ、むねを痛むであらう。このやうな他人の痛心を生れながら富貴の人はいかやうにつつしむべきであらうか。かくの如き人は戒めがたく、その身を慎しむことがなかなかできないものである。亦心に憍心はなくとも、ありのままに振舞へば、傍らの賤しき人はうらやみ痛むであらうから、是をよくつつしむを憍奢をつつしむといふのである。反對に、我身の富は果報にまかせ、貧賤の人が見てうらやむのをはばからないのを憍心といふのである。外典にも、貧家の前を車に乘つて過ぎることなかれと書かれてある。我が身は朱車に乘ることができても、貧家の前は遠慮しなければいけない。然るに、今の學人僧侶は、智慧法門を以て人に勝たうと考へてゐるものがあるが、決してこのやうな憍心を起してはならない。我より劣つてゐる人に對して非義をいひ、或は先輩や同輩等の非義をいつたり、誹謗したりするのは、憍奢のはなはだしきものといふべきである。古人も、智者の邊にしては負くるとも、愚者の邊にして勝つべからず、といつてゐ

る。自分がよく知つてゐる事を人がよく心得てゐないからといつて、その人の非を鳴らすのは、却つてそれは己が非といふべきである。法門に關することでも先人先輩を誹つてはならず、亦愚癡朦昧な人のうらやみねたみをかふやうな場合は、能々つつしまなければならない。（第五）以上が學道第一の用心たる心の貧しさに就いての道元の所説の大概である。

學貧は衣食住を貪らぬことに盡きる。「學道の人衣糧を煩ふこと莫れ。只佛制を守て、世事を營むこと莫れ。佛の言く、衣服に糞掃衣あり、食に常乞食あり。いづれの世にか此の二事の盡ることあらん。無常迅速なるを忘れて、徒らに世事に煩ふこと莫れ。露命の且く存せるあひだ、佛道を思て餘事をことゝとすること莫れ。」（第一）僧の衣食たる糞掃衣と常乞食の盡きるやうなことはいかなる世にもないのであるから衣食の如き世事に心を營むことなく、無常迅速なるこの世に、露の命の存せるあひだ、學佛道に專心せよといふのである。「當世の人、多く造像起塔等の事を佛法興隆と思へり。是れ亦非なり。直饒ひ高堂大觀玉をみがき金をのべたりとも、是れに依て得道の者あるべからず。只在家人の財寶を佛界に入れて、善事をなす福分なり。亦小因大果を感ずることあれども、僧徒の此の事をいとなむは、佛法興隆にはあらざるなり。たとひ草菴樹下にてもあれ、法門の一句をも思量し、一と時の坐禪をも行ぜんこそ、誠の佛法興隆にてあらめ。今ま僧堂を立んとて、勸進をもし、

隨分にいとなむ事は、必ずしも佛法興隆と思はず。只當時學道する人もなく、いたづらに日月を送るあひだ、只あらんよりはと思ふて、迷徒の結緣ともなれかし、亦當時學道の徒がらの坐禪の道場のためなり、亦思ひ始めたる事のならぬとても恨みあるべからず。只柱ら一本なりとも立てて置たらば、後來も、かく思ひくはだてたれども成らざりけりと見んも、苦るしかるべからずと思ふなり。」（第二）法門の一句をも思量し、一時の坐禪をも行ずるには、草菴樹下でもできる。造像起塔を立派に營むことが、必らずしも佛法興隆とは考へられない。造像起塔も要するに、迷徒の結緣のため、學人坐禪の道場として企てられるのであるから、たとへ、それが柱一本だけで終つたとしても苦しからずといつてゐるのである。

學貧の用心について、道元の垂示は到れり盡せりといふてよい。道元は云ふ、人人皆生得の衣食がある。衣食は思念したからといふて與へられるものでもなく、求めなければ來ないものでもない。在家人すら衣食のことは運を天に任かせて忠孝に碎身するものがある。況や、出家人は佛道以外の一切他事に心を用ひてはならない。出家には、釋尊の遺付された福分があり、諸天の應供される衣食があり、亦天然生得の命分がある。だから求めず思はずとも、任運の命分があるべきである。大宋宏智禪師の會下天童には堂中七百人、堂外三百人、合計常住物千人分の用途があつた。然

るに、好き長老が住持となつてゐたので、諸方の僧が雲集し、堂中に千人居り、堂外に五六百人もゐた。そこで知事の人が宏智に訴へて、常住物は千人分しかないところへ、衆僧が多く集つて用途不足で困る、何とかせねばなるまい云つた。すると宏智が云ふに、「人人皆口ちあり、汝ぢが事にあづからず、歎くこと莫れ」と。學人は只須らく衣食などのことに心をとどめず、一向に學道すべきである。(第二) 併し、或る人がこれを反駁して云く、「末世邊土の佛法興隆は、寧ろ閑居靜處をかまへ、衣食等のことには何の心配もないやうにして、佛法を修行したならば利益も廣からうに」と。この反駁に對して道元は答へて云ふ。「今まこれを思ふに然らず。それに附ては、有相著我の諸人あつまり學せんほどに、その中には一人も發心の人は出來るまじ。利養につき財欲にふけりて、縱ひ千萬人集りたらんも、一人無からんに猶おとるべし。惡道の業因のみ自ら積て、佛法の氣分なきゆへなり。もし清貧艱難にして、或ひは乞食し、あるひは果蓏等を食して、常に飢饉して學道せんに、是れを聞て若し一人も來り學せんと思ふ人あらんこそ、誠との道心者、佛法興隆ならめとおぼゆる。艱難清貧によりてもし一人もなからんと、衣食ゆたかにして諸人あつまりて佛法の無からんとは、只八兩と半斤となり。」(第三) 併し、このやうに衣食に心をとどめず、學道するといふは、如何なることであらうか。いふまでもなく、「苦しく愁るとも、只しひて學道す」(第四) ること

にほかならない。道元は云ふ、人と生れて、誰か好衣を望まぬものがあらうか。誰か美味を貪らないものがあらうか。然るに道を學ばうと思ふ人は、山に入り雲に眠り寒きをも忍び、飢へをも忍ばなければならない。先人は道を守るためには忍び難き苦しみを忍んだのである。だからこそ、後人も是れを聽て道を慕ひその德を仰ぐのである。しかし古人もみな金骨ではなく、佛の在世にも上器ならざるものもあつたし、多くの比丘の中にはよからぬ心を起すものもあつた。然るに、後には皆得道し羅漢となつたといはれてゐる。だから我らもいかに賤しく拙なくとも、發心修行すればかならず得道するものと知つて、發心すべきである。古の人も皆苦を忍び害に堪えて、愁ひながら修行したのである（第四）と。雲水と呼び慣はされてゐる修道者は、雲の如く定つた住所もなく、水の如く流れ流れて寄る邊もないものでなければならない。故に衣食のことも兼ねてから思ひあてがふやうなことがあつてはならない。若し失食絶煙したならば、その時に臨んで乞食すればよい。豫め特定の人を當てにしてゐるのは、物を貯へる所謂邪命食といふべきである。たとへ衣鉢の外一物も貯へ持たずとも、一人の檀那をも賴み一類の親族をも賴むのは、卽ち自他ともに縛住せられるから不淨食といはなければならない。このやうな邪命食や不淨食で養はれた身心を以て、諸佛淸淨の大法を悟らうと思つても、到底不可能である。「たとへば藍にそめたる物は靑く、檗（きはだ）にそめたる物は黃な

るが如く、邪命食を以てそめたる身心は卽ち邪命身なるべし。この身心を以て佛法をのぞまば、沙を壓して油を求むるが如し。」（第五）衣食のことについては、只時にのぞんで、ともかくも、道理に契ふやうにはからふべきである。兼ねてからとかく思ひたくはへるのはみな間違ひである。能々思量すべきであると道元は訓へてゐる。（第五）このやうに衣食について思ひわづらはないから、學道の人は衣食に豐かではない。我が國には昔から、顯密二敎に名を得、後代にも知られた人も多く、或は亦詩歌管絃の家、文武學藝の才、其道を嗜む人も少くないが、このやうな人人で未だ一人も衣食に豐かであつたといふことを聞いたことがない。何れも皆貧を忍び他事を忘れて、一向に其の道を好む故に、其の名をも得たのである。道元は云ふ、このやうな例は支那にもある、「大宋國の叢林には、末代なりといへども、學道の人千萬人ある中に、或は遠方より來り、或は鄕土より出たる者も有り。いづれも多分は貧なり。しかあれども、いまだ貧をうれへとせず。只悟道の未だしきことをのみ愁へて、或は樓上、或は閣下に坐して、考妣に喪するが如くにして、一向に佛道を修するなり。まのあたり見しことは、西川の僧、遠方より來れりし故に、所持の物なし。纔に墨二三丁もてり。そのあたひ兩三百文、此國の兩三十文にあたれるを持て、唐土の紙の下品なる極めて弱きを買ひとりて、襖ま或は袴などに作てきぬれば、起ち居に破るるおとして、あさましきをも顧みずうれ

へざるなり。或る人の云く、汝郷里にかへりて、道具裝束をととのへよと。答て云く、郷里遠方なり、路次の間に光陰を空ふして、學道の時を失せんことを憂ふと云て、猶更に寒をも愁へずして學道せしなり。しかある故に、大國にはよき人も出來るなり、」と。（第六）　このやうによき學人の出來るのも、學貧のおかげである。學人の誤まるのは多く富貴から起る。釋迦在世の時、調達が嫉妬を起したのも、日に五百車の供養があつたからである。富貴は唯自らを誤まるのみでなく、亦他をして惡をなさしむる因緣ともなる。まことの學人は、富貴であつてはならない。道元は戒めて云ふ、「たとひ淨信の供養も多くつもらば、恩の思ひを作して報を思ふべし。此の國の人は、亦我が爲に利を思ひて、施をいたす。笑ひて向へる者によく與るは、さだまれる世の道理なり。只他の心にしたがはんとしてなさば、これ學道の障りなるべし。只飢を忍び寒を忍び、一向に學道すべきなり」と。（第六）

學道第一の用心として學貧を說くこと大略以上の如くである。道元は學貧に次いで吾我名利の離るべきを懇切に訓へてゐる。「是を離れずんば、行道は頭燃を拂ひ精進は翹足をしるとも、只無理の勤苦のみにて、出離にはあらざるなり。」（第五）　たとへ、離れ難き恩愛を離れ、捨て難き世財を捨て、叢林に入つて參禪これを久しうするも、吾我名利を離れるといふ此の故實を審らかに知らずし

で修行してゐては、到底道を悟り、心を明らめることはできない、徒らに一生を空しく過すことになる。吾我名利を離れ得ない幾多の場合を道元は列擧して次のやうにこれを戒めてゐる。初めは道心を起して僧にもなり師に從つて學道に精進しても、佛となり祖とならうと思はず、我が身の貴く我が寺の貴いことを、施主や檀那にも知らせ、親類眷屬にもいひきかせて、人に尊ばれ、供養されることを希ひ、剩さへ他の衆僧は皆不當不善であるが、我れ獨りは道心もあり善人であるといふことを、人に云ひきかせ思ひしらせようと心を碎くものがある。ものも知らぬお人好しの在家人などは、これを道心者である、貴き人であると思ふかもしれぬが、これこそ、云ふに足らざるもの、五闡提等の惡比丘のごときものである。必らず地獄に落ちる心ばへである。このやうなものに比べれば多少はよいとしても、いまだ名利を棄て切れないものに次のやうなのがある。施主檀那をも貪らず父母妻子をも捨てはてて、叢林に入つて行道することはしてゐても、生來懶惰懈怠な者は、思ひのまま懶ける事も慙かしいので、長老や首座等の見てゐる時は、一生懸命行道してゐる樣子をし、見てゐない時は事に觸れて懶け徒らに時をおくるものがある。これは、出家せずにゐて怠けてゐるものに比べれば優しだけれども、猶吾我名利を捨て得ざるものであるといはなければならない。第三に、總じて師や先輩や同僚たちが見てゐようがゐまいが、佛道は他人の爲めでなく我が身の爲め

であるといつて、我が身心こそ佛となり祖とならねばならぬと、眞實に勤め勵む人もある。これは前の人人に比べれば、まことの道者かと思へるが、これも自分ばかりよくならうと思つて修行するのであるから、猶いまだ吾我を離れてゐるのではない。諸佛菩薩に隨喜せられることを希ひ、佛果菩薩を成就しようと思つてはゐるが、我欲名利の心をなほ棄て切ることが出來ないからである。これらは何れも皆いまだ百尺の竿頭を離れえず、とりついてゐるのに似てゐる。吾我名利を離れるといふのは、身心を佛法になげすてて、更に悟道得法までをも望む事なく修行することをいふのである。名を惜しむといふことがいはれてゐるが、眞實の學人は名さへ惜しむことがない。これを不汚染の行人といふ。有佛の處にもとどまることをえず、無佛の處をも急に走過すとは、かかる行人をいふのである。（第五）

學道は須らく、上に述べたやうに名利を離れなければならないとともに、我執をも離れなければならない。「設ひ千經萬論を學し得たりとも、我執を離れずんば、終に魔坑に落つべし。」（第五）我を離るるといふのは、我が身心を佛法の大海に抛向して、苦しく愁ふるとも、佛法に隨つて修行することである。例へば、乞食などしたならば、人がこれを惡くいひ、みにくいといふであらうと氣にかけるものがあるが、このやうなことを氣に病む間は、いかにしても佛法に入ることはできない。

人情世情をすべて忘れて、唯佛法の道理に任せて學道せねばならない。また、我が身の器量を顧み佛法に契ふまひなどと思ふのも、我執を持つてゐるからである。人目を顧みたり、人情を憚るのは、卽ち我執の本である。(第五)

我執を離れるには、「身心を放下して一向に佛法に入」(第三)らなければならない。百尺の竿頭にのぼつて、一歩をすすめ、足をはなてば死ぬるであらうと思つて、つよく取つく心のあるのを、ひと思ひに思ひ切つて、身命をも放下しなければならない。「佛法の爲には身命を惜むことなかれ。俗猶を道の爲には身命をすて、親族をかへりみず、忠を盡し範を守る。是を忠臣とも云ひ賢者とも云ふなり。」(第五)「寧しろ道ありては死すとも、道無ふしていくることなかれ。」(第四) 併し、我執を離れるとは身心を放下することであるならば、身心を放下するといふは、いかなることであらうか。道元は示して云く、「行者先づ心をだにも調伏しつれば、身をも世をも捨ることは易きなり。只言語につけ行儀につけて人目を思ひて、此の事は惡事なれば人あしく思ふべしとてなさず、我れ此の事をせんこそ佛法者と人は見んとて、事に觸て善きことをせんとするも、猶を世情なり。然あればとて、亦恣ひままに我が心に任せて惡事をするは、一向の惡人なり。所詮惡心を忘れ我が身を忘れて、只一向に佛法の爲にすべきなり、向ひ來らんことに隨て用心すべきなり。初心の行者は、先づ

世情なりとも人情なりとも惡事をば心に制し、善事をば身に行ずるが、便ち身心を捨つるにて有なり。」（第三）道元は惡事をば心に制し、善事を身に行ずるのが、身心を捨てるといふことで、心を調べるとは正にこのことであるといつてゐる。併し、このやうに心をだに調伏すれば、身を捨てることは易いことであるといつてゐるかと思ふと、また、他のところでは、「身體血肉だによくもてば、心も隨てよくなると醫方等にも見へたり。いはんや學道の人、持戒梵行して佛祖の行履に任て身を治むれば、心も隨て調子なり。」（第六）と說いてゐる。一方に身を捨てるには心を調へなければならないが、他方に心を調へるには、持戒梵行して佛祖の行履に任せて身を治めなければならない。身を治めることが便ち身を捨てることでなければならない。心を調へることが、また心を捨てることでなければならない。「世情なりとも人情なりとも惡事をば心に制し、善事をば身に行ずるが、便ち身心を捨つるにて有なり。」（第三）と前に述べたのはこのことであらう。しかも、惡事をば心に制し、善事をば身に行じて、身心を捨てるためには、「學人は靜坐して、道理を以て此の身の始終を尋ぬべし。」と道元は訓へてゐる。此の身體の始終とは如何なる道理であらうか。「身體髮膚は父母の二滴、一息とどまりぬれば山野に離散して終に泥土となる。何を持てか身と執せん。況や法を以て見れば、十八界の聚散、いづれの法をか決定して我が身とせん。」（第四）この我が身の始終不可得の道

理を尋ね究めることを學道の用心とせねばならない。惡事を心に制し、善事を身に行ふにはこの道理に達しなければならない。このやうに一方に於て、靜坐して我が身の始終を尋ね知るとともに、他方、心操の調へ方についても、これを知らなければならない。心操を調へるとは、或る經に佛法を學せんと思はば、三世の心を相續することなかれとある如く、「さきの諸念舊見を記持せずして、次第にあらためゆく」（第五）ことである。忠言逆耳といはれてゐるが、いかに耳に逆ふとも忠言には强ひて隨はなければならない。いかに我が心に違ふとも、佛道の言理ならば、全くそれに隨つて舊見を棄てて、改めてゆかなければならない。これこそ學道第一の故實である。道元は戒めていふ。「われ昔日、我が朋の中に我見を執して知識をとぶらひける者ありき。我が心に違するをば心得ず と云て、我見にあひかなふをば執して、一生空しくすぎて佛法を會せざりけり。我れそれを見て智發してしりぬ。學道は然あるべからずと。」（第五）自己の舊見を存する限り、道を得ることはできない。しかも我々の執見はまことに根深いものがある。「本より誰がおしへたりとも知らざれども、心と云は念慮知覺なりと思ひ、心は草木なりと云へば信ぜず。佛と云へば相好光明あらんずると思ふて、佛は瓦礫と說けば耳を驚かす。かくのごときの執見、父も相傳せず、母も敎授せず、只無理自然に久く人のことばにつきて信じ來れることなり。」（第四）かかる根强い本執をもこれを佛說に隨

つて次第に改めて行かなければならない。然らざれば道を得ることはできない。「然あれば、今も佛祖決定の說なれば、あらためて心は草木と云はば、便ち草木を心と知り、佛は瓦礫といはば、瓦礫を便ち佛なりと信じて、本執をあらため去らば、道を得べきなり。」（第四）

以上の如く、學道の人は、貧を學び、名をすて、利をすて、己見本執を離れ、惡心を制し、身命をも惜しまず、萬事をなげすてなければならないのであるが、よき道人となるためには更に恩愛をも捨てなければならない。隨聞記にはこのことに關して次のやうな例話を擧げてゐる。嘗てある僧が問ふて云く、私には老母が一人ある。私は一人子で、老母は全く私を賴りに生きてゐる。老母の恩愛もことに深く、私の孝順の志も決して淺くはない。しかし學道に專心するために私は遁世したいと思ふが、さうすれば母は一日も暮しを立てることが難しい。老母を捨てて道に入るべき道理があらば、敎へていただきたいと。これに對して道元は次のやうに答へてゐる。此のことは難事である。他人のはからひによつて定めるべき事ではない。ただ自ら能々思惟して、誠に佛道に志しが有るならば、いかなる手段をも案出して、母儀の安堵して生活できるやうに支度して、而して後に佛道に入るならば、兩方俱によい事である。一心に思ふことならば必らず遂げられないことはない。きつと手段方便がみつかるものである。天地善神の冥加もあつて必らず成就するものである。唐の

曹溪の六祖惠能はもと新州といふところの樵人であつたが、薪を賣つて母を養つてゐた。一日市で客が金剛經を誦してゐるのを聽いて發心し、母の許を辭して黃梅山の弘忍に參じた時、銀子十兩を得て母儀の生活の資にそれを充てたといはれてゐる。これも一心に思ひつめたので、天が與へたものであらうと思はれる。このことを能々思惟すべきである。これが最上の道理であると思ふ。次に、母儀の亡くなられるのを待つて、その後何の障碍もなくなつてから、佛道に入るならば、萬事が本意通りであつて結構なことである。併しながら、老少不定は世の慣ひであるから、萬一老母が生き殘り、自分の方が先き立つやうなことが出來てくるかも、判らない。このやうな事のくひ違ひが起つたならば、自分は佛道に入り得なかつたことを悔み、老母は是れを許さなかつたことの罪に沈んで、兩人俱に益なくして、互に罪を得たらばどうするか。これに引きかへ、若し、此世をすてて思ひ切つて、佛道に入つたならば、老母はたとひ餓死しても、一子を放るして道に入らしめた功德は、得道の良緣ではなからうか。もつとも、曠劫多生にも捨て難い恩愛ではあるけれど、此世に人間と生れて佛敎に遭遇して捨てたならば、眞實の報恩者といふことが出來る。どうしてこれが佛意に適はぬことがあらうか。一子出家すれば七世の父母得道すといふ。また何ぞ一世の浮生の身を思ふて、永劫安樂の因を空しく過さんや、といふ道理もある。これらのことを能々自ら思ひめぐら

さなければならない。（第三）得道の爲めには、父母の恩愛さへも離れなければならない。併し、父母に對する報恩はこれをいかに爲すべきであらうか。道元はこれに對して次のやうに說示してゐる。「孝順は最用なる所なり。然あれども、其の孝順に在家出家の別あり。在家は孝經等の說を守て生につかへ死につかふること、世人みな知れり。出家は恩をすてて無爲に入る故に、出家の作法は恩を報ずるに一人にかぎらず、一切衆生をひとしく恩深しと思ふて、なす處の善根を法界にめぐらす。別して今生一世の父母にかぎらば無爲の道にそむかん。日日の行道、時時の參學、只佛道に隨順しもてゆかば、其れを眞實の孝道とするなり。」（第二）更に「一人の爲にうしなひやすき時を空く過さんこと、佛意に合なふべからず。」と云つて、重病の師を日本に殘し、得道の爲めに入宋した全和尙の場合を示したのち、道元は、「今の學人も、或は父母の爲、或は師匠の爲とて、無益の事を行じて徒らに時を失ひて、諸道にすぐれたる佛道をさしをきて、空く光陰を過すことなかれ。」（第五）と戒めてゐる。

七

以上一切放下を說いて到れり盡せりといふべきである。しかし、道元の說く學道の用心は以上を

以て盡きるのではない。道元の誨へる用心には親の子に對するやうな深切なこころづかひが感得される。世情人情一切を棄てよと嚴しくせまつてくるうちにも、學道の用心の、そのまた用心ともいふべき、彼の人間洞察のこまやかさを示す、細心の注意が盛られてゐる。

「世をすて家をすて、身をすて心を捨つるなり。能々思量すべきなり。世を遁て山林に隱居すれども、吾が重代の家を絶やさず、家門親族のことを思ふもあり。亦世をものがれ家をもすてて親族境界をも遠離すれども、我が身を思て、苦るしからんことをばせじ、病ひ起るべからん事は佛道なりとも行せじと思ふも、いまだ身を捨ざるなり。亦身をも惜まず難行苦行すれども、心佛道に入らずして、我が心に差ふことをば、佛道なれどもせじと思ふは、心を捨てざるなり。」（第一）このやうにどこまでも餘すところなく捨て行くことが、學道精進の姿にほかならない。道元はまた、棄つべき世をすて、行すべき道を行ずるについての用心として、佛道の爲には不惜身命のこころ、佛意に隨つて死せんと思ふ心を發すべしと云つて、次のやうに說いてゐる。「古人の云く、朝に道を聞て夕べに死すとも可なりと。いま學道の人も此の心あるべきなり。曠劫多生の間だ。いくたびか徒に生じ、徒らに死せしに、まれに人身を受けて、たまたま佛法にあへる時、此の身を度せずんば何れの生にか此身を度せん。縱ひ身を惜みたもちたりともかなふべからず。ついに捨てて行く命ちを、

一日片時なりとも、佛法のために捨てたらんは、永劫の樂因なるべし。後のこと明日の活計を思ふて、棄つべき世を捨てず、行ずべき道を行せずして、徒らに日夜を過すは、口惜きことなり。只思ひきりて、明日の活計なくば、飢へ死にもせよ、寒ごへ死にもせよ、今日一日道を聞て、佛意に隨て死せんと思ふ心を、まづ發すべきなり。然るときんば、道を行じ得んこと一定なり。此の心なければ、世をそむき道を學する樣なれども、猶しり足をふみて、夏冬の衣服等のことをした心にかけて、明日猶明年の活命を思ふて、佛法を學せんは、萬劫千生學すともかなふべしともおぼへず。」

(第二)以上のやうに、世情を一物ものこさぬやうに捨てて行かなければならないとともに、これを捨てるに當つては身命をも惜しまない勇猛心がなければならない。併し、人情を捨てるにも、事に觸れ物に隨つて、學貧の用心に次の問答に見られるやうな、細かいこころづかひがなければならない。或時の高弟の懷奘が道元に問ふて云く、「衲子の行履、舊損の衲衣等を綴り補ふてすてざれば、ものを貧惜するに似たり。亦舊きをすてて新しきを隨て用れば、新しきを貪求する心あり。兩ながら咎あり。畢竟していかんが用心せん。」道元答へて云く、「貪惜貪求の二つをだにも離れなば、兩頭ともに失なからん。ただし、破たるを綴て久からしめて、新きをむさぼらずんば、可ならんか。」

(第三)一口に世情を捨て、人情を棄てよといつても、このやうな、細かく暖かい心遣りがなければな

らない。ゆへに、道元も、「佛法の中にもそぞろに身をすて世をすつればとて、棄つべからざる事をすつるは非なり。」(第二)と云つて、次のやうな似而非なる佛法者、獨りよがりの道心者を戒めてゐる。「此の土の佛法者道心者を立る人の中にも、身をすつるとて、人はいかにも見よと思ひて、ゆへ無く身をわるくふるまひ、或は亦世を執せぬとて、雨にもぬれながら行きなんどするは、內(心)外(相)ともに無益なるを、世間の人はすなはち此らを、貴き人かな世を執せぬなんどと思へるなり。」(第二) このやうな似而非なる道心者に對して、佛制を守り戒律の儀をも心にとどめて、自行化他佛制にまかせて行ずるものがあると、却つて名聞利養を欲しげな僧だといつて、世人は輕蔑するやうであるが、夫れが却つて、吾がためには佛敎にも隨ひ、內心外相の德を成就する機緣ともなるのであると云つてゐる。佛道では、けつして棄つべからざるものを棄てよとはいはず、行ふべからざるものを行へとは云はない。ただ棄つべきを棄て、爲すべきを爲せと說くのみである。不惜身命を說くとはいへど、「病も治しつべきをわざと死せんと思ひて治せざるも外道の見なり。佛道の爲には命を惜しむことなかれ。亦惜しまざることなかれ。より來らば灸治一所煎藥一種なんど用ひん事は、行道の障りともならじ。」(第六)と道元は訓へてゐる。併し、「行道をさしおきて病を治するをさきとして、後に修行せんと思ふは非なり。」(第六)「大慧禪師、ある時尻に腫物出ぬれば、醫師此を

見て大事の物なりと云ふ。慧の云く、大事の物ならば死ぬべきや否や。醫師云く、ほとんどあやふかるべし。慧の云く、若し死ぬべくんば彌よ坐禪すべしと云て、猶を強て坐しければ、其の腫物うみつぶれて別の事もなかりき。古人の心かくのごとし。病をうけて猶よ坐禪せしなり。今の人病なふして坐禪ゆるくすべからず。病は心に隨て轉ずるかと覺ゆ。世間にしやくりする人に、虚言してわびつべき事を云つげぬれば、それをわびしつべき事に思ひ、心に入て陳ぜんとするほどに、忘れて其のしやくり留りぬ。我もそのかみ入宋の時、船中にて痢病せしに、惡風出來て船中さはぎける時、やまふ忘れて止りぬ。是を以て思ふに、學道勤勞して他事を忘るれば、病も起るまじきかと覺るなり。」（第五）道元の說く不惜身命が、「病は心に隨て轉ずるかと覺ゆ。」とか、「學道勤勞して他事を忘るれば、病も起るまじきかと覺るなり。」とかいふやうな行き屆いた深切心に裏付けられてゐることを看逃してはならない。命は惜しむことなかれ、亦惜しまざることなかれといふ。「佛道は一大事なれば、一生に窮めんと思ひ、日日時時を空くすごさじと思ふべきなり。古人の云く、光陰虚く度ることなかれと云云。病を治せんと營むほどに、除かずして增氣し苦痛いよいよせめば、少しも痛のかるかりし時に、行道せんと思ふべきなり。病を治するには、減ずるもあり增するもあり。亦治せざれども減じ、治するに增するもあり。これを能能思ひ分くべきなり。」（第六）これらは

まさに捨身の眞隨を道破せるものといふべきである。

以上道元の說く一切放下の用心故實を列擧して來たのであるが、その要は、理由もなく身心をくるしめ、爲すべからざることを爲せと、佛敎には勸めることはない。ただ戒行律儀に隨がつてゆけば、自らに身心のやすらかになるから、一向に佛制に順ずべきを說くのである。(第二) ゆへに、近代の僧侶が多く世俗に隨ふべしと云ふのを斥けて、道元は次のやうに戒めてゐる。「世間の賢すらなほ民俗にしたがふことをけがれたることと云ひて、屈原の如きんば、世は擧て皆よへり、我は獨り醒たりとて、民俗に隨はずして、終に滄浪に沒す。況や佛法は事と事とみな世俗に違背せり。俗は髮を飾る。僧は髮を剃る。俗は多く食す。僧は一食す。皆そむけり。然して後に還て大安樂の人となるなり。故へに僧は一切世俗にそむけるなり。」(第二) このやうに、佛法が一切世俗と事毎にうらはらであるならば、そこに佛法の道理が存するのでなければならない。佛道には、棄つべからざるを棄てよとはいはず、行ふべからざるものを行へとは云はない。ただ、棄つべきを棄て、爲すべきを爲せと說くのである。ここに佛道の道理がなければならない。行道もこの道理を心得て行ずべきである。この點について道元は示して云く、「漢の高祖の時、ある賢臣の云く、政道の理亂はなはの結ぼふれを解くが如し。急にすべからず。能々むすびめを見てとくべしと。佛道も亦かくの如

し。能々道理を心得て行ずべきなり。」（第五）然らば、世情人情をすてて入るべき佛道の道理とは如何なるものであらうか。道元は夜話に、「學人は必ずしぬべきことを思ふべき道理は勿論なり。」（第二）と云つてゐる。觀無常をまづ說いてゐるのである。併し、道元は更に言葉を續けて云ふ、「たとひ其のことをば思はずとも、暫く先づ光陰を徒らに過さじと思ひて、無用のことをなして徒らに時を過さず、詮あることをなして時を過すべきなり。其のなすべきことの中にも、亦一切のことづれか大切なると云ふに、佛祖の行履の外は、みな無用なりと知るべし。」（第二）人世に何が確實なるかと云ふに、死といふことがその最たるものであらう。學人はまづ人の必らず死ぬべきことを思べきであるといふのが、佛法の敎へる第一の道理である。而して、人生に於て、なすべきことの數ある中にも、いづれが大切であるかといふに、佛祖の行履の外は、みな無用であるといふことを知らなければならないといふのが、佛敎の說く第二の道理である。第一の道理は人生に何を觀るべきかについて敎へる。第二の道理は人生に於て、何を爲すべきかについて示す。第一の道理について道元は次のやうに訓へてゐる。「古人多くは云ふ、光陰空く度ること莫れ。亦云く、時光徒らに過すことなかれと。今學道の人須く寸陰を惜むべし。露命消やすし、時光速かにうつる、暫くも存する間だ、餘事を管することなかれ。唯須く道を學すべし。今時の人、或は父母の恩を捨て難しと云

ひ、或は世人誹謗しつべしと云ひ、或は貧ふして道具調ひ難しと云ひ、或は非器にして學道に堪がたしと云ふ。かくのごとく識情を廻らして、主君父母をも離れえず、妻子眷屬をもすてえず、世情に隨ひ財寶を貪ぼるほどに、一生空く過して、正しく命終の時に當ては後悔すべし。須く靜坐して道理を案じ、速かに道心を起さんことを決定すべし。主君父母も我に悟りを與ふべからず。妻子眷屬も我が苦みを救ふべからず。財寶も我が生死輪廻を截斷すべからず。世人も我をたすくべきにあらず。非器なりと云て修せずんば、何れの劫にか得道せんや。只須く萬事を放下して一向に學道すべし。後時を存することなかれ。」次に、第二の道理について更に考へ深めて行かなければならない。佛祖の行履の他は一切無用なりと知つて、これに隨ひ行くといふことは、いかなることであらうか。換言すれば、佛道を行ずるとは、いかなることであらうか。それはどこまでも、世情人情を捨てることに他ならない。夜話に道元は說示して次のやうに述べてゐる。「學道の人は人情を棄べきなり。人情をすつると云は、佛法に隨ひ行くなり。」(第二) 人情をすてることがやがて佛祖の行履に忠なる所以である。「世人をほく小乘根性にて、善惡をわきまへ是非を分ちて、是をとり非をすつるは、みな是れ小乘根性なり。只先づ世情をすてて佛道に入るべし。佛道に入には、我こころに善惡を分けてよしと思ひあしと思ふことをすてて、我が身よからん我が意ろなにとあらんと思ふ

心をわすれて、善くもあれ惡くもあれ、佛祖の言語行履に隨がひゆくなり。吾が心に善しと思ひ、亦世人のよしと思ふこと、必らずしも善からず。然あれば人めもわすれ吾が意ろをもすてて、佛敎に隨がひゆくなり。」(第二)　善惡是非についても、學人はこのやうな心構へがなければならない。得道得法の人といふのは、この道理をこころへたる人の謂である。「身もくるしく心も愁ふるとも、我が身心をば一向にすてたるものなればと思ふて、苦るしくうれへつべきことなりとも、佛祖先德の行履ならばなすべきなり。此の事はよきこと、佛道にかなひたらめと思ふて、なしたく行じたくとも、もし佛祖の行履に無からん事はなすべからず。是れ必らず法門をよくここへたるにてあるなり。」(第三)　佛祖の行履の外は、みな無用なりと知ることが、法門をよくこころへてゐることになる。併し、この法門をよくこころへるといふことは、一朝一夕にして成ることではない。我が舊見をすてて、次第に心を佛祖の言語行履に移してもてゆくことである。「吾が心にも亦本より習ひ來たる法門の思量をば棄てて、只今見る所ろの祖師の言語行履に次第に心ろを移しもてゆくなり。かくのごとくすれば、智慧もすすみ悟りも開くるなり。本より學せし處ろの敎家文字の功もすつべき道理あらば棄てて、今まの義につきて見るべきなり。法門を學する事は本より出離得道のためなり。我が多年の功つめり、なんぞたやすく捨てんと猶を心ろ深く思ふ、卽ち此の心を生死繫縛の心と云ふ

なり。能々思量すべし。」（第二）このやうに學人は、自己の舊見を改めて、佛道に心をうつしてゆかなければならないと同時に、佛祖の行履、佛教の道理に隨順なるためには、世の誹謗をこころにかけてはならない。「學道の人、多分云ふ、若し其のことをなさば世人是を謗せんかと。此の條太だ非なり。世間の人いかに謗するとも、佛祖の行履、聖教の道理にてだにもあらば依行すべし。設ひ世人擧つてほむるとも、聖教の道理ならず、祖師も行ぜざることならば、依行すべからず。」（第三）ほめられても、祖師の行ぜざることならば、行ふべからずといふ。併し、問題は、これら世人の誹謗や賞讃が何處から來てゐるかといふ、その根據に存するのである。「かくの如く謗し讃する人、必ずしも佛祖の行を通達し證得せるにあらず。なにとしてか、佛祖の道を世の善惡を以て判すべき。然あれば、世人の情には順ふべからず。只佛道に依行すべき道理ならば、一向に依行すべきなり。」（第三）一向に佛道に依行するといふことは、言は天下に滿つれども口過なく、行天下に遍けれども怨害なし、と古人の言にもある如く、云ふべき所を云ひ、行ふべき事を行ふことにほかならない。是れ至德要道の言行といふべきである。かかることは何も、佛道にのみ限られたことではなく、世俗の道に於ても、その言行も私曲を以てはからひ行へば、おそらく過のみであらうと思はれる。「衲子の言行は先證是れ定れり。私曲を存すべからず。佛祖行じ來れる道なり。學道の人各各

自ら己身を顧るべし。身を顧ると云は、吾が身心いか様に持べきぞと顧るべし。然るに衲子はすでに是れ釋子なり。如來の風儀を慣ふべきなり。身口意の威儀は、先佛行じ來れる作法あり。各各其の儀に隨ふべし。俗すら猶を服は法に應じ、言は行に隨ふべしと云へり。況や衲子は一切私を用ふべからず。」（第六）衲子はすでに是れ釋子であるから、當に如來の風儀を慣ふべしといふ。如來の風儀のいかなるものなるかについては、前にも種々觸れて來てゐる。「衲子は雲の如く定れる住所もなく、水の如くに流れゆきて、よる處もなきをこそ僧とは云ふなり。」（第五）ともいはれてゐる。また、世間では、善惡定めるに、例へば苦を受くべきを惡と云ひ、樂をまねくべきを善と云ふ。然るに、「僧は清淨の中より來れるものなれば、人の欲を起すまじきものを以て、よしとしきよきとするなり。」（第四）とも說かれてゐる。更にはまた、帝道の故實の諺に、虛襟に非ざれば忠言をいれず、とある如く、己見を存すれば、師の言は耳に入り難い。師の言が耳に入らなければ、師の法を得ることはできない。從つて、師の言の耳に入り得るためには、「只法門の異見を忘るるのみにあらず、世事及び飢寒等を忘れて、一向に身心を清めて聞く時、親く聞得るなり。かくの如く聞く時は、道理も不審も明らめらるるなり。」（第六）清淨なる身心を以て師の言を聞くことが要求されてゐる。僧は清淨でなければならない。身心脫落とはかかる清淨なる境地をいひ、雲水の如き留滯なき生涯を

指し、また無欲明朗なる心境を云ふのでなければならない。信の現成とはまさに、このやうな身心脱落脱落身心の相である。

八

一切放下についての道元の誨へは、一應以上を以て打切る。しかし、かゝる一切放下は何人にも可能なのであらうか。一切を放下しうるやうな人は選ばれたる少數ではないのであらうか。この問題に對して、道元は次の樣に說いてゐる。

「佛々祖々皆な本は凡夫なり。凡夫の時は必ずしも、惡業もあり、惡心もあり、鈍もあり、痴もあり、然あれども盡く改めて知識に隨ひて修行せしゆゑに皆佛祖と成りしなり。今の人も然あるべし。我が身愚鈍なればとて、卑下することなかれ。今生に發心せずんば、何の時を待ちてか行道すべきや。今强ひて修せば、必ずしも道を得べきなり。」（第六）所謂人の利鈍といふものも、實は志の至ると至らざるとによるのである。譬へば、落馬の際など、地上へ落ちるまでの僅かの間に、種種の思ひがこもごも起るものである。身命にかかわるやうな大事件が惹起する時には、利鈍の別なく、誰しも、智慧才覺を廻らすものである。然れば今日明日をも知れぬ命だと思ひ、切にはげまし

て、志を强ひて進める時、悟を得ぬといふことがない。實際には、却つて、世智に長け、聰明なものよりも、愚鈍のやうでも、道を求める切なる志を發する人の方が速かに悟を得る。釋迦在世の頃、弟子に周梨槃特といふ恐ろしく愚鈍な男がゐた。一偈さへ、前半を覺へれば、後半を忘れ、後半を覺へると、前半を忘れるほどの物覺えの惡い男であつたが、求道の根性切なりしため、一夏の修行に證を得たといふ。このやうに、有智高才を要せず、靈利聰明によらぬは、まことの學道であるが、かく云へばとて、誤つて盲聾痴人の如くなれとすすめるのではない。「有智の無道心なると、無智の有道心なると、始終如何」といふ一僧の問ひに對して、道元は、「無智の有道心は終に退すること多し。智慧ある人は無道心なれども、終には道心を起すなり。當世にも現證是れ多し。然あれば、先づ道心の有無を云はず學道を勤むべきなり。」と答へてゐる。前には、道心のなきものは、學道の門にいるべからず、あやまりて、いれりとも、かんがへていだすべしと云ひながら、今またここでは、まづ道心の有無を云はず學道を勤むべきなりとすすめてゐる。これは矛盾である。がこの矛盾のあるところ、そこに學道に於ける修行の特異な性格と構造とが祕められてゐるのである。（この點については、他日學道に於ける行の構造を論ずる際に、考究されなければならない。）更に、また、「破戒にして人天の供養を受け、無道心にして徒に如來の福分を費さんより、在家人に隨つ

て在家の事をなして、命ながらへて能く修行せんこと如何」といふ問ひ發する僧があつた。自分は破戒無道心であるにも拘らず、僧であるといふ特權で、いろいろの恩惠をうけてゐるが、いつそ在家人となつて、世俗の生活をつづけながら、修行をすることは如何であるかといふ問ひである。道元はこれに答へて云ふ、「誰か云ひし破戒無道心なれと。ただ強ひて道心を發し、佛法を行ずべきなり。いかに況んや、持戒破戒を論せず、初心後心を分たず、齊しく如來の福分を與ふとは見えたれども、破戒ならば還俗せよ、無道心ならば修行せざれとは見えず」と。(第一)道心は、このやうに智愚を論せず、持戒破戒に拘らず、更には道心の有無さへ問はずに、ただ強ひて、「發し難きを發し、行じ難きを行ず」るところに發する。この故に發心はまさに難中の難といふべく、否この難きを敢へて爲すところに、そこに求道の心が存するのでなければならない。道心が發し難きを發し、行じ難きを行ずるところに發するとともに、次のやうな發心の仕方のあることを看逃してはならない。「學人たとひ道心なくとも、良人に近づき善緣にあうて、同じことをいくたびも聞き見るべきなり。この言一度聞きたらば、重ねて聞くべからずと思ふことなかれ。道心一度再起したる人も、同じ事なれども聞くたびごとに心みがかれて、いよ〳〵精進するなり。また、無道心の人も、一度二度こそつれなくとも、度々聞きぬれば、霧露の中に行くが如く、いつぬるるとも覺えざれども、

自然に衣のうるほふが如くに、良人の言をいくたびも聞けば、自然にはづる心も起り、實の道心も起るなり。故に知りたる上にも聖教をばいくたびも見るべし。師の言も聞きたる上にも重ねて聞くべし。いよ〳〵ふかき心有べきなり。」（第五）良き人たちに隨順してゆけば、あたかも船に乘つて行くに、自分は漕ぎ方を知らなくとも、良き船頭に任せてゆけば、無事に彼の岸に到るが如く、自然と道心を發するものである。形から入れといふことをも說いてゐる。「學道の用心は只本執を放下すべし。まづ身の威儀をさきとしてあらたむれば、心も隨ひて改まるなり。先づ律儀戒行を守れば心も隨ひて改まるべし。」（第六）宋の習俗に、父母の孝養の爲、宗廟に多數聚會して泣くまねをするうちに、終にはまことに泣けてくるといふのがある。學道の用心として身の威儀を重視してゐるのである。これを要するに、道の得不得は志の至ると至らざるとにあるのである。眞實求道の志を發して、熱心に參學する人に道を得ぬと云ふことはない。道元の云ふ如く、大宗國の叢林にも一師の會下の數百千人の中、まことの得道得法の人はわづかに一人か二人であるが、その得道の用心故實といつては、「先づ欣求の志の切なるべきなり」といふことより他にありやうがない。譬へば重き寶をぬすまんと思ひ、强き敵をうたんと思ひ、絕世の美人にあはんと思ふ心ある人は、行住坐臥、事に觸れ折に隨ひ、種種もの事は變り來るとも、それにつれて隙間もなく、己れの望みのものを得

ようと心懸けるものである。しかもこの心がまこと切實であるときは願望の成就せぬといふことはない。必ずその目的を達するものである。「かくの如く道を求むる志切になりなば、或は只管打坐の時、或は古人の公案に向はん時、若しくは、知識に逢はん時、實の志を以て行ずる時、高くとも射つべく深くとも釣りぬべし。是ほどの心發らずして、佛道の一念に生死の輪廻をきる大事をば如何が成ぜん。」(第二)と道元は力強くも言ひ切つてゐる。最後に、出家在家の問題が殘つてゐる。道元は正法眼藏に於て、出家の功德を說いて、出家こそ三世諸佛の正法であり、諸佛諸祖の成道はたゞこれ出家受戒によるのみと云つてゐるが、隨聞記では、「遁世といふは世人の情を心にかけざる」(第二)ことであると云ひ、辨道話に「世務は佛法をさゆとおもへるものはたゞ世中に佛法なしとのみしりて、佛中に世法なきことをいまだ知らざるなり」と說いて、世務(在家生活)の佛法をさまたげざることを明かにしてゐる。佛法に住して行へば世法もみな佛法であり、佛法もまた世法である。隨聞記には、また、次のやうな問答を載せて、一口にいふ出家在家に、二重の意味のあることを訓へてゐる。或る時一人の尼が道元に問ふた。「世間の女房なんどだにも佛法とて勤學す。比丘尼の身には少少の不可ありとも何ぞ佛法にかなはざるべきと覺ゆ。いかん。」と。在家の女達には世俗生活を享受しながら佛法を修してゐるものがあるが、彼女等のことを考へれば、比丘尼に多少

のつまづきがあつても許さるべきではなからうかといふ問である。これに對して道元は次のやうに答へてゐる。「この義然あらず。在家の女人は其の身ながら佛法を學して得ることはありとも、出家の人出家の心なからんは得べからず。佛法の人を擇ぶにあらず、人の佛法に入らざればなり。出家在家の義其の心異なるべし。在家人の出家人の心あるは出離すべし。出家人の在家人の心あるは二重のひがごとなり。」(第三)と。これによつてみても、道元は、在家人で出家の心あるものは出離しうるものとしてゐることがわかる。

九

最後に、信はいかなる相で存在するものであるかといふ、問題についての道元の說示に傾聽しよう。信の在り方の問題である。前に述べたやうに、信は道を求める心として、道心とも菩提心とも呼ばれてゐる。從つて、信の在り方は、菩提道心の在り方にほかならない。

道元は正法眼藏道心の卷に、次の如くに說いてゐる。道心のまことの在り方を知る人は稀れである。世には端目には道心あるごとくみえて、まこと道心なき人が多い。これに反して、まことの道心ありながら、ひとにはそれと覺られぬ人もある。道心のある、なしといふことは、容易に知り難

いこのやうに、道心のある、なしを外面から見分けることのむつかしいのは、要するに、今の世には、まことの道心者の稀少なためである。故に道を求めるものは、さしあたり、愚かなものや、悪しき人の言葉を信ぜず、これを耳にせぬにしくはない。このことは學道第一の用心である。道心の在り方とその根據とについて、道元は次のやうに說いてゐる。「この心もとよりあるにあらず、いまあらたに欻起するにあらず、一にあらず、多にあらず、自然にあらず、凝然にあらず、わが身のなかにあるにあらず、わが身は心のなかにあるにあらず、この心は法界に周遍せるにあらず、前にあらず、後にあらず、あるにあらず、なきにあらず、自性にあらず、佗性にあらず、共性にあらず、無因性にあらず。しかあれども感應道交するところに、發菩提心するなり。諸佛菩薩の所受にあらず、みづからが所能にあらず、感應道交するゆゑに自然にあらず。」（發菩提心）このやうにすべて否定の言葉をもつて語られてゐる菩提（道）心は感應道交するところに發し來るといふのである。感應道交は吾人の普通に持ち合はしてゐる慮知心、卽ち凡夫の心そのものに現はれるのでなければならない。「この慮知心にあらざれば、菩提心をおこすことあたはず。」といつてゐる。併し「この慮知心をすなはち菩提心とするにはあらず、」どこまでも「この慮知心をもて菩提心をおこすなり。」と說い

てゐる。「いまの質多慮知の心、ちかきにあらず、とほきにあらず、みづからにあらず、佗にあらずといへども、この心をもて、自未得度先度佗の道理にめぐらすこと、不退轉なれば、發菩提心なり。」（同上）とも説いてゐる。

然らば、この發菩提心はいかにして可能なのであらうか。「おほよそ發菩提心の因緣、ほかより菩提心を拈來せず。菩提心を拈來して發心するなり。菩提心を拈來するといふは、一莖艸拈じて造佛し、無根樹を拈じて造經するなり。いさごとをもて供佛も、漿をもて供佛するなり。一摶の食を衆生にほどこし、五莖の華を如來にたてまつるなり。」（發菩提心）このやうに發心の因緣となるべきは吾人の周圍をとりまく一切の物でなければならない。「佗のすすめによりて、片善を修し、魔に嬈せられて禮佛する、また發菩提心なり。しかのみにあらず、知二家非家一、捨レ家出家、入山修道、信行法行するなり。造佛造塔するなり。讀經念佛するなり、爲衆說法するなり、尋師訪道するなり、結跏趺坐するなり、一禮三寶するなり。一稱南無佛するなり。かくのごとく八方法蘊の因緣、かならず發心なり。」（同上）このやうに發心の因緣は自他の別もなく、また一切の行がその因緣たりうるのである。「あるひは夢中に發心するもの得道せるあり、あるひは醉中に發心するもの得道せるあり、あるひは飛花落葉のなかより發心得道するあり、あるひは海中にして發心得道するあり、これみな

發菩提心中にして、さらに發菩提心するなり。身心のなかにして、發菩提心するなり。諸佛の身心中にして、發菩提心するなり。佛祖の皮肉骨髓のなかにして、發菩提心するなり。」(上同) 發心の機緣は隨時隨處に在り、これを繰返すことによつて、彌增しに道心を固めることができる。從つて、發心に初發菩提心といふべきものがある。「發心とは、はじめて自未得度先度他の心をおこすなり、これを初發菩提心といふ。この心をおこすよりのち、さらにそこばくの諸佛にあひたてまつり、供養したてまつるに、見佛聞法し、さらに菩提心をおこす、雪上加霜なり。」(上同) 雪の上に霜を加へる如く、道心の上にも更に道心を加へゆくのである。求道の心をいよ〳〵深めゆくのである。從つて、「發心は一發にして、さらに發心せず、修行は無量なり、證果は一證なりとのみきくは、佛法をきくにあらず、佛法をしれるにあらず、佛法にあふにあらず。」(發無上心) といはなければならない。これに反して、「千億發の發心は、さだめて一發心の發なり、千億人の發心は、一發心の發なり、一發心は千億の發心なり。」(上同) といひうるのである。であるから、佛果菩提の證の境地と初發心の境涯とは「格量せば、劫火螢火のごとくなるべしといへども、自未得度先度他のこころをおこせば、二無別なり。」(上同) でなければならない。併しながら、「世間の常法にいはく、たとひ生ずれども熟せざるもの三種あり、いはく、魚子・菴羅果・發心菩薩なり。おほよそ退失するものおほきが

ゆゑに、われも退失とならんことを、かねてよりおそるるなり。」（發菩提心）初發菩提心より雪上加霜の如く、一發菩提心を百千萬發してゆくうちに、菩提心の退轉することあるを期しがたい。このゆゑに、菩提心はこれをかたく守護して退轉なからしめねばならない。「菩薩の初心のとき、菩提心を退轉すること、おほくは正師にあはざるによる。」（同上）道心退轉の主因は正師をもたぬところにあるといふ。「正師にあはざれば、正法をきかず。正法をきかざれば、おそらく因果を撥無し、解脱を撥無し、三寶を撥無し、三世の諸法を撥無す。いたづらに現在の五欲に貪著して、前途菩提の功德を失す。あるひは天魔波旬等、行者をさまたげんがために、佛形に化し、父母・師匠、乃至親族・諸天等のかたちを現して、きたりちかづきて、菩薩にむかひて、こしらへ、すすめていはく、佛道長遠、久受諸苦、もともうれふべし、しかし、まづわれ生死を解脱し、のちに衆生をわたさんには。行者このかたらひをききて、菩提心を退し、菩薩の行を退す。まさにしるべし、かくのごとくの說は、すなはちこれ魔說なり。菩薩しりてしたがふことなかれ、もはら自未得度先度他の行願を退轉せざるべし。自未得度他の行願にそむかんが、ごときは、これ魔說としるべし、外道說としるべし、惡友說としるべし。さらにしたがふことなかれ。」（同上）守護菩提心を說いて餘贏なしといはねばならない。守護菩提心は學道の全行程に一貫してゐなければならない。修證一等の上から

みれば、發心・修行・菩提・涅槃は一應學道の段階であると認められることとともに、同時にその段階は否定されねばならない。「しかあれば、發心・修行・菩提・涅槃は同時の發心・修行・菩提・涅槃なるべし」(發菩提心)と道元もいつてゐる。「一發菩提心を百千萬發」(同上)せねばならぬと同時に、その「千億發の發心は、さだめて一發心の發」(發無上心)でなければならないところに、修證一等の眞義があるのである。